

日本農本主義の構造

—老農農本主義、官僚農本主義、教学農本主義、
社会運動農本主義、アカデミズム農本主義
の比較検討を通して—

1998年

提出先

岩手大学大学院連合農学研究科

武田 共治

日本農本主義の構造 — 老農農本主義、官僚農本主義、教学農本主義、
社会運動農本主義、アカデミズム農本主義の
比較検討を通して

武田共治

序論 問題意識と論文の構成

第一章 問題意識

「農本主義」と聞けば、〈前時代の遺物ではないか〉、あるいは〈今時何が農本主義だ〉と考える人も、多いであろう。しかし、本論文においては、その農本主義を研究対象とする。農本主義とは、一つの農民理解(農民像)である。農村社会学が、農民理解の学たらんとするならば、農本主義が重要な研究対象となることは、当然なのである。

ところで、日本農民に対するイメージとしては、どんなものがあるだろうか。例えば、橘孝三郎は、「土百姓と言ふ言葉。何といふのろまな、馬鹿にしたひゞきをもつてをるのだらう(1)」と述べていた。橘が非難した〈日本農民は、のろまで馬鹿である〉という嘲笑的農民像は、その嘲笑的性の程度差があるとしても、かなり浸透していた農民像であろう。それは、「農民は、勿論例外あるも、これを他の職業者に比すれば、卑怯、未練、臆病にして剛毅、勇敢、進取、精悍の氣に乏しい嫌いがある(2)」という鎌田正忠の農民像にもうかがえる。橘が指摘したように、そうした嘲笑的農民像からすれば、「日本農民は日本なる国民社会に対して亡ぶべくしてその存在を許されたる退化群(3)」とみなされることになり、農民を歴史創造の主体として捉えることはできないのである。

また、〈日本農民は、したたかで、ずる賢く、油断がならない〉という農民像もある。例えば、筆者が、農本主義の実証研究の場としている山形県荘内地方においては、明治維新以後も旧荘内藩勢力が「御家禄派」を形成していたが、その指導者であった菅実秀(旧荘内藩家老)の教えをまとめた書物である『臥牛先生遺教』には、「小民は多く慾深きものゆえ、自分勝手の苦情は必ずいふものなり(4)」という記述がある。ここに示された、欲深い農民、自分勝手な農民という農民像は、封建的領民観であった。しかし、この農民観は、農民の生産の側面ではなく販売の側面のイメージ化によっても成立することから、農産物の商品化に伴い、封建的性格の枠を超え、近代日本の農民像として再生され、現代においても、広く浸透することになったのである。

さらに、〈日本農民は、素朴で単純である〉という農民像も、広く浸透した農民像であろう。生成期の日本農村社会学には、そのような傾向が見られる。例えば、井森陸平は、日本農村社会の人間関係の特質を分析して、農民の孤立性、都会への

憧憬性、文化的統一性、簡単明瞭性、実行的性格、痛飲多食睡眠の嗜好性、自己本位性、保守性などを指摘していたし(5)、笠森伝繁も、個人性、非文化性、保守性、付和雷同性などを指摘していた(6)。ここには、〈日本農民は、自己本位から付和雷同し、物事をよく考えることなしにすぐ実行する、素朴で単純な人間である〉という農民像が描かれている。素朴とみる見方には否定的評価が含まれることもあるが、〈素朴で素晴らしい〉というように肯定的評価が含まれることもある。いずれにせよ、こうした農民像も、農民を無力で無知な存在と見ており、啓蒙の対象と捉えていたと言えよう。

これと似て非なる農民像として、〈日本農民は、黙々と自覚的に生き生きと働く〉という勤労的農民像がある。この農民像には、少なくとも建前として、日本農民の生き方に対する肯定的評価が含まれている。拝金主義、営利主義、利己主義といった都会的な考え方や資本主義的な考え方に嫌悪感を抱く人間にとっては、勤労的農民像は魅力ある人間像であった。この農民像は、多くの農本主義者に共有されている。例えば、加藤完治は日本農民魂を強調し、農業を「天地の化育に賛する聖業」と捉え、「真面目な日本国民に対して、その生活に必要な衣食住を潤沢に供給し、もってその生活を保証することを自己の天職、日本農民の使命であると信じて疑わぬ農民(7)」を理想としたが、そこに示される農民像も、勤労的農民像であった。また、橋孝三郎は、嘲笑的農民像に対し、「日本更生の歴史創造の原動力たらしめんとして時代が日本のために用意しておいた新興群(8)」とみる見方を対置した。この橋の農民像も、勤労的農民像であった。「歴史創造の原動力」という橋の農民像は、「庶民生活に於ける創造性の存在は今迄如何に無関心に放置されて来た事であろうか(9)」として、農民生活に歴史の創造性を認める有賀喜左衛門の農民像とも重なるものである。

ここで、重要なことは、農本主義が、日本農民に対して、良かれ悪しかれ、絶大な影響力を行使し得たという事実である。この事実が、農本主義の農民理解が、農民の共鳴を得るものであったことを示している。換言すれば、農本主義が〈農民的なもの〉を探り出すことに成功していたことを、うかがわせるのである。このように、農本主義が農民の共鳴を得るためには、農本主義が日本農民特有の行為様式を理解していなければならず、その基底に存在する日本農民的な〈感覚、心情、考え方〉(以下〈心性〉と呼ぶ)を反映していなければならない。それは、日本農民の日常行為の判断基準をも規定しているものであると考えられる。そもそも、そこに訴えるものがないと、どんな社会〈思想〉も、どんな〈主義〉も、日本農民を動かすことができないし、日本農民を味方にすることもできない。国民の圧倒的多数を耕作農民が占める戦前社会においては、耕作農民の共感なしに、どんな社会勢力も成立・存続が不可能なのである。それ故、農民層に影響力を有した個人や組織・団体

の〈思想〉や〈主義〉には、耕作農民の基本的性格に関する把握が含まれていると考えることができる。それは、耕作農民に対する肯定的理解でなければならない。そうした、耕作農民に対する肯定的理解が、農本主義なのである。

それは、農業経営主体(耕作農民、老農)にとっては自己把握、自己確認であるが、権力(農政、農業団体)、思想(教学、社会運動)、科学(農学、農政学、農業経済学、農村社会学など)にとっては把握すべき課題となる。したがって、農本主義は、農業経営主体、権力、思想、科学の中に認知することができるのである。本論文では、農業経営主体の中に認知される農本主義を「老農農本主義」、権力の中に認知される農本主義を「官僚農本主義」、思想の中に認知される農本主義を「教学農本主義」および「社会運動農本主義」、科学の中に認知される農本主義を「アカデミズム農本主義」として区別する。こうして、本論文においては、各種農本主義の歴史的展開を捉え、各種農本主義が日本農民をどのように捉えてきたのかを再検討し、それらを比較することで、全体としての農本主義の構造を浮かび上がらせることを課題とする。

註

- (1)橋孝三郎『農村学(前編)』、建設社、一九三一年、二頁
- (2)鎌田正忠『農民心理の研究』、明文堂、一九三二年、四九～五〇頁
- (3)橋孝三郎『農村学(前編)』、一一頁
- (4)小山孫二郎「大地主と庄内米の流通 — 山居倉庫の顛末 —」、『日本農業発達史別巻上』、中央公論社、一九五八年、七四一頁より引用。
- (5)井森陸平『農村社会学』、目黒書店、一九二九年、一五～二九頁
- (6)笠森伝繁『農村社会学』、日本評論社、一九三〇年、六九～八二頁、
- (7)『加藤完治全集』第五巻、加藤完治全集刊行会、発行年非明記、四八四頁
- (8)橋孝三郎『農村学(前編)』、一一頁
- (9)有賀喜左衛門「日本家族制度と小作制度」、『有賀喜左衛門著作集』1、未来社、一九六六年、七頁

第二章 本論文の構成

本論文の問題意識に基づき、まず第一編「日本農本主義研究の課題」では、農本主義に関する先行研究を整理・検討し、本論文の課題を明確化する。そこで、第一章「農本主義研究の文献とその検討視点」において、文献整理を行う。その上で、いくつかの農本主義研究を取り上げ、そこにおける学的成果を検討する。検討視点としては、①農本主義に対する関心、②農本主義の基本的性格と本質的役割の理解、③農本主義の歴史的展開の理解、の三点を重視する。こうして、第二章「農本主義

に対する関心をめぐって」、第三章「農本主義の本質と役割の理解をめぐって」、第四章「農本主義の歴史的展開の理解をめぐって」という構成となる。

第二編「日本農本主義の歴史的展開」においては、第一に、主要な農本主義者たちを、①数学者、②老農、③官僚、④学者、⑤社会運動家に分類し、時代区分を行い、各時代の状況との関わりで彼等の主張を検討し、それらの関連を追究することで、農本主義の歴史的展開の特徴を捉える。こうして、第一章「徳川封建制動揺・解体期の農本主義」、第二章「原始蓄積期における農本主義」、第三章「産業資本確立期における農本主義」、第四章「独占資本主義期における農本主義」、第五章「国家独占資本主義期における農本主義」という構成となる。

第三編「日本農本主義の比較分析」においては、第一に、主要な農本主義者たちの主張の特徴と思想的・階級性格について検討する。第二に、農本主義・農村社会学とマルクス主義の相互批判を検討する。こうして、第一章「農本主義の特徴と性格」、第二章「農本主義批判と反批判」となる。以上の検討を踏まえ、結論「日本農本主義の全体構造」を述べることにする。

こうして、本論文の構成は、以下の通りとなる。

序論 問題意識と論文の構成	1
第一章 問題意識	1
第二章 本論文の構成	3
第一編 日本農本主義研究の課題	7
第一章 農本主義研究の文献とその検討視点	7
第一節 農本主義研究の文献	7
第二節 農本主義研究文献の検討視点	9
第二章 農本主義に対する関心をめぐって	11
第三章 農本主義の本質と役割の理解をめぐって	17
第四章 農本主義の歴史的展開の理解をめぐって	28
第二編 日本農本主義の歴史的展開	36
はじめに — 本編の課題	36
第一章 徳川封建制動揺・解体期の農本主義	38
第一節 封建権力と教学農本主義	38
第一項 封建権力と武士道	38
第二項 荻生徂來の教学農本主義	42
第二節 農本主義の源流 — 老農農本主義の形成	46
第一項 老農の手本 — 二宮尊徳の老農農本主義	46
第二項 老農と農民一揆	53
第二章 原始蓄積期における農本主義	56

第一節 開明派官僚と勸農政策 — 老農農本主義の官製化	56
第二節 保守官僚農本主義の成立	62
第一項 保守国粋派官僚と保守官僚農本主義	62
第二項 品川弥二郎、平田東助の保守官僚農本主義	64
第三節 老農農本主義の地域的实践 — 石川理紀之助の農民組織化	71
第四節 教学農本主義と経済活動 — 荘内教学の展開	76
第三章 産業資本確立期における農本主義	92
第一節 官僚農本主義の展開	92
第一項 前田正名の保守官僚農本主義	92
第二項 柳田国男と官僚時代 — 柳田農政学	97
第二節 石川理紀之助と地主農本主義 — 適産調を中心に	104
第三節 官学アカデミズムと農への注目	110
第一項 官学アカデミズムの形成	110
第二項 新渡戸稲造の近代主義的貴農説	110
第四節 山崎延吉と社会運動農本主義 — 農村自治運動	116
第四章 独占資本主義期における農本主義	124
第一節 革新官僚農本主義と小作立法 — 石黒忠篤の小作法案	124
第二節 アカデミズムと農本主義	130
第一項 横井時敬の小農論 — 官学アカデミズム	130
第二項 柳田国男の農村・農民認識 — 非官学アカデミズム	138
第三節 横田英夫と社会運動農本主義 — 小作農本主義	143
第五章 国家独占資本主義期における農本主義	151
はじめに — 本章の課題	151
第一節 農村疲弊と社会運動農本主義	152
第一項 権藤成卿 — 社稷農本主義	152
第二項 橘孝三郎 — 土百姓農本主義	159
第三項 石原莞爾派 — 東亜連盟協会と農本主義	170
第二節 農村疲弊と官僚農本主義	184
第一項 農村疲弊と革新官僚農本主義 — 経済更生運動	184
第二項 農村疲弊と保守官僚農本主義 — 岡田温の地主農本主義	187
第三節 農村疲弊と教学農本主義	192
第一項 加藤完治の神道農本主義 — 武士道と農民道、開拓理念	192
第二項 菅原兵治の郷学農本主義 — 農士道論	205
第四節 農村疲弊とアカデミズム農本主義	214
第一項 柳田国男の非官学アカデミズム農本主義	214

第二項 農村社会学とアカデミズム農本主義 — 桜井武雄の 農村社会学批判と関連して	221
はじめに	221
(一) 日本農村社会学生成把握の基本視角	221
(二) 「農村・社会学」の展開	222
[1] 「農村・社会学」生成の社会学的基盤	222
[2] 「農村・社会学」の先駆的試み	224
[3] 「農村・社会学」の体系化	231
(三) 「農村社会・学」の展開	233
[1] 「農村社会・学」の意義	233
[2] 「農村社会・学」の社会学的体系化	233
第五節 農村疲弊と農本主義運動 — 山形県荘内地方を事例として	237
はじめに	237
第一項 荘内の加藤完治派 — 山木武夫と農業倉庫設立運動	237
第二項 荘内の菅原兵治派 — 長南七右衛門と荘内松伯会の運動	245
第三項 荘内の石原莞爾派 — 平田安治と東亜連盟荘内支部の運動	251
第三編 日本農本主義の比較分析	258
第一章 農本主義の特徴と性格	258
第一節 農本主義の特徴	258
はじめに	258
第一項 農本主義における農業主義	259
第二項 農本主義における小農主義	262
第三項 農本主義における家族主義	264
第四項 農本主義における勤労主義	265
第五項 農本主義における愛国主義・日本主義	266
第二節 農本主義の性格	269
第一項 農本主義の思想的性格	269
第二項 農本主義の階級的性格	270
第二章 農本主義批判と反批判	274
第一節 マルクス主義の農本主義批判、農村社会学批判	274
第一項 マルクス主義の農本主義批判	274
第二項 マルクス主義の農村社会学批判	277
第二節 農本主義、農村社会学におけるマルクス主義批判	279
第一項 農本主義のマルクス主義批判 — 橘孝三郎、加藤完治	279
第二項 農村社会学のマルクス主義批判 — 土田杏村、井森陸平	282

第一編 農本主義研究の課題

第一章 農本主義研究の文献とその検討視点

第一節 農本主義研究の文献

農本主義を直接の研究対象とした主要な文献は、以下の通りである。

桜井武雄『日本農本主義』、白揚社、一九三〇年

石渡貞雄「農本主義の経済学 — 生産論と分配論」、『農業問題』五号、日本農村調査会、一九四七年

桜井武雄「昭和の農本主義」、『思想』四〇七号、岩波書店、一九五八年五月

奥谷松治「日本における農本思想の流れ」、『思想』四〇七号、岩波書店、一九五八年五月

筑波常治「中村直三論」、『思想』四〇七号、岩波書店、一九五八年五月

安達生恒「農本主義論の再検討」、『思想』四二三号、岩波書店、一九五九年九月

安達生恒「家の光の歴史 — ある農本主義とその媒体 —」、『思想の科学』一八号、中央公論社、一九六〇年六月

筑波常治「日本農本主義序説」、『思想の科学』一八号、中央公論社、一九六〇年六月

岡田耕作「加藤完治の農民教育思想」、『思想の科学』一八号、中央公論社、一九六〇年六月

武内哲夫「農本主義と農村中産層」、『島根農大研究報告』、第八号、一九六〇年

山崎春成「農本主義論の問題点」、『経済学雑誌』、第四三巻第五号、大阪市立大学、一九六〇年

山田英世「農本思想再検討の一視点」、『愛知学芸大学研究報告』、第一〇集、人文科学、一九六一年

松永伍一「農民短歌と超国家主義」、『思想の科学』二八号、中央公論社、一九六一年四月

山田英世「精農型農本主義 — 山崎延吉論」、『思想の科学』三二号、中央公論社、一九六一年八月

酒井好郎「日本地主制と農本主義」、『経済論叢』、第八八巻第五号、一九六一年

丸山真男「日本ファシズムの思想と運動」、『現代政治の思想と行動』、未来社、一九六四年

『現代史資料』(三)~(五)、(「国家主義運動」一~三)、みすず書房、一九六四年

橋川文三編『超国家主義』、現代日本思想体系三一、筑摩書房、一九六四年

中村雄二郎「農本主義思想のとらえ方について」、『近代日本における制度と思想』

- 、未来社、一九六七年
- 山本 克「農本主義思想史上における横田英夫」、『岐阜大学教養部研究報告』、第四号、一九六八年
- 伝田 功「国民主義思想と農本主義」、『近代日本農政思想の研究』、未来社、一九六九年
- 網澤満昭『近代日本の土着思想』、風媒社、一九六九年
- 小倉武一『小倉武一著作集』第五巻、『農政への社会学的接近』下、農山漁村文化協会、一九七一年
- 滝沢誠『権藤成卿』、紀伊國屋書店、一九七一年
- 栗原藤七郎「非国家的農本主義思想について — 昭和初期の農本主義の一潮流」、『農村研究』第三三、三四合併号、一九七二年二月
- 松沢哲成『橋孝三郎 — 日本ファシズム原始回帰論派』、三一書房、一九七二年
- 網澤満昭「農本的超国家主義にみる日本と自然」、『伝統と現代』二〇号、伝統と現代社、一九七三年三月
- 松本健一「安藤昌益と農本のアナキズム」、『伝統と現代』二二号、伝統と現代社、一九七三年七月
- 鈴木正節「権藤成卿と橋孝三郎」、『伝統と現代』二三号、伝統と現代社、一九七三年九月
- 網澤満昭『農本主義と天皇制』、イザツ書房、一九七四年
- 松本健一「日本農本主義と大陸 — 加藤完治をめぐって —」、『思想』六二五号、岩波書店、一九七六年
- 斎藤之男『日本農本主義研究』、農山漁村文化協会、一九七六年
- 網澤満昭『日本近代と民俗的原質』、風媒社、一九七六年
- 網澤満昭『農本主義と近代』、雁思社、一九七九年
- 網澤満昭『日本の農本主義』、紀伊國屋書店、一九八〇年
- 橋川文三『昭和超国家主義の諸相』、橋本文三著作集五、筑摩書房、一九八五年
- 東敏雄『勤労農民的経営と国家主義運動』、お茶の水書房、一九八七年
- 小松和生『日本ファシズムと国家改造論』、世界書院、一九九一年
- 安達生恒『山崎延吉 — 農本思想を問い直す』、リプロポート、一九九二年
- 森田美比『昭和史のひとつこま — 農本主義と農政』、筑波書林、一九九三年
- 菅野正「農本主義について考える」、日本村落研究会編『村落社会研究』五号、一九九六年
- 武田共治「農本主義とマルクス主義」、『現代社会学とマルクス主義』、アカデミア出版会、一九九七年

第二節 農本主義研究文献の検討視点

第一節の文献リストには、抜け落ちていたものもあるであろうが、これを見る限りでは、農本主義研究は、一九六〇年前後、および七〇年前後に集中的に行われたことが分かる。一九六〇年、『思想の科学』は「みのがされている農本主義」なる特集を組んだ。その「編集後記」で、久野収は、「現在の日本人の行動様式のなかで、明確な意識をとまわらない行動様式は、意識をとまなう行動様式よりもずっとふかく、ひろいのだが、この行動様式を支配する原理は、一体どのような特色をもつのであろうか。日本の農本主義の思想的問題性は、この原理をえぐり出す重要な手がかりとなる(1)」と記している。「六〇年安保」の時期は、本格的な高度経済成長へ突入する時期であった。戦後における価値観の転換のもとで、合理的行為様式が支配的になったかのようにあったが、それでは汲み尽くせない「明確な意識をとまわらない行動様式」が根強くあり、それを把握することなしに「日本人の行動様式」は理解できず、それを理解することなしに、いかなる政治・社会運動も成り立たないという問題意識であった。また、同誌には「ある農本主義者の回想と意見」として、橋孝三郎と竹内好の対談が掲載されている。そのなかで、竹内は、農本主義の「思考様式なりエネルギーを無視しては、日本の思想や社会、また歴史も将来も考えられないのではないか。こう私たちは考えまして、『思想の科学』で農本主義の問題を特集することになったわけです(2)」と述べている。農本主義を肯定するにしても、否定するにしても、農本主義は、無意識の日本人の行動様式を把握した例として、注目されたのである。

「七〇年安保」の時期は、高度経済成長の破綻が、現実的にも理論的にも確認されてくる時期であった。この時期において、「近代の超克」が再論され、資本主義の、したがって近代社会の理念そのものを根底から問い直す問題意識が高まる。それが、農本主義への関心となって現れる。例えば、一九七三年、『伝統と現代』は、「日本回帰 — 西洋近代と日本との相克」なる特集を組んだ。その編集部後記によれば、「日本近代の宿痼である西洋文明と伝統的日本との相克の劇の暗渠に、わたしたちの思想と感性の土壌を透視すべく企図された(3)」ものであった。そこに、網澤満昭は「農本的超国家主義にみる日本と自然」なる論考を寄稿した。網澤は農本主義批判を終生の課題としているが、同時に「共同体を停滞性の根源であるかのようにみなす知識人」をも批判した。日本回帰とは「共同体」や「共同態」の再評価を含んでおり、その文脈から農本主義が注目されたのである。

しかし、七〇年代後半から八〇年代においては、農本主義研究は姿を消してしまったかのようなのである。一定の満足感を伴いながら、必然と見えるほど、国民生活が資本主義に包摂され、そこに依存する現実がある。こうした状況においては、その克服原理自体が見え難い。そうした中で、現代の克服原理を前近代原理(共同体主

義)に求める立場など、陳腐と見え、非現実的と見え、反動思想とさえ見えてくるのは、当然である。そのようなことが、七〇年代以降の農本主義研究の停滞に関わっていると考えられる。

しかし、九〇年代に入り、再び農本主義研究が活発化してきた。それは、現代日本社会が過激な競争型社会に突入し、過度の個人主義が日常化したことと無縁ではない。それに伴い、社会のあらゆる局面に歪みが生じ、社会そのものの成立が困難となるに至っている。これを筆者は、「社会関係の切断傾向」と呼んでいる。具体的には、自殺現象(社会関係の一方的切断)、老人問題(世代間の切断)、セクハラ問題(男女間の切断)、いじめ・不登校問題(教師と生徒の切断、子ども社会の切断)、地域間格差(地域間の切断)、産業間格差(産業間の切断)、個人主義的消費生活様式の深化(家庭内切断)など、さまざまな局面で指摘できる。そうした中で、経済効率の悪いものが切り捨てられてきた。農家経営は、その一つである。例えば、農水省「新しい食料、農業、農村政策の方向」(一九九二年)において、「経営規模は、個別経営体で、一〇～二〇ha」がめざされたが、個別農家の規模拡大が想定されているとは考え難い。むしろ、企業の農業参入が注目されており、農家が農業を担うことが基本的に否定されたと言える。これはやがて、日本農業そのものの崩壊を加速させることになる。その結末として、弱者を排撃する強者も自壊し、日本社会そのものが崩壊していく姿が想定される。筆者も含めて、九〇年代における「農」を重視する農本主義の再考は、こうした時代認識と無縁ではないのである。

そこで以下においては、とりわけ、桜井武雄、網澤満昭、奥谷松治、筑波常治、安達生恒、菅野正の諸論考を取り上げ、検討する。他の論考のいくつかについては、必要に応じて、他編他章において取り上げることにする。検討の視点は、前述のように、①農本主義に対する関心、②農本主義の基本的性格と本質的役割の理解、③農本主義の歴史的展開の理解、の三点である。関心とは、価値関心や方法的関心のことである。こうした関心の所在が、各論者の農本主義の基本的性格の理解、あるいは、農本主義の政治的、経済的、社会的、文化的等々の役割の理解を左右する面がある。また、農本主義の役割は、歴史的に変化すると考えられる。それは、農本主義と権力との、あるいは社会諸勢力との関わりの問題でもある。こうした三点の検討を通して、農本主義研究の到達点と残された課題を明らかにする。それが、具体的に本論文が解明すべき課題となる。

註

(1)久野収「編集後記」、『思想の科学』一八号、中央公論社、一九六〇年六月、九六頁

(2)橘孝三郎、竹内好「ある農本主義者の回想と意見」、『思想の科学』一八号、

中央公論社、一九六〇年六月、一四頁

(3)『伝統と現代』二〇号、伝統と現代社、一九七三年三月、一七四頁

第二章 農本主義に対する関心をめぐって

農本主義を研究してきた研究者は、農本主義に対して、いかなる方法的関心や評価的関心を示してきたのであろうか。桜井、網澤、奥谷、筑波、安達、菅野の諸論考の中には、農本主義を全面的に肯定したものは見当たらない。農本主義は、基本的に否定すべきものとして研究されてきたと考えられる。とりわけ、全面的に否定すべきものとして捉えたのは、桜井武雄である。桜井は、橘孝三郎や加藤完治などの農本主義者と同時代を生き、鋭い農本主義批判の論陣を張った、いわゆる「講座派」の論客であった。桜井の『日本農本主義』(一九三〇年)は、農本主義の体系的理解として、農本主義研究の古典的な地位を占めるものである。桜井が農本主義を打倒の対象とするのは、農本主義が日本における社会主義革命に対して、極めて有害な作用を及ぼすと考えていたからである。桜井は、農本主義を小農主義、あるいは老農主義と理解していたが、小農主義とは、「ミゼラブルな零細農耕」を「何ら憂ふべき事態ではなく、かえってむしろ誇るべき日本農業の特長と見做す(1)」考え方である。桜井は、「全く封建主義に迎合せる老農の思想が生粋の農本主義であり、ひいては後の日本主義に継承発展させられた(2)」と指摘するが、老農とは、「地主的恩威を以て、或は勸農精励一途の愆愆を以て、封建主義的重課にむほんしようとする一揆をとり静め、かゝる運動に対する屈強の防塞設定の役割を演じた(3)」ものであった。この老農の求める理想的農民像とは、過酷な現状に耐え、利己を捨て、勤労に励む農民像である。それ故、農本主義は、貧しい零細農耕の現実問題を隠蔽する役割を担っている、と捉えられる。だから、桜井から見れば、農本主義の浸透は農民を現状肯定主義に導くものであり、革命理論上、極めて有害なことであったのである。こうして、桜井の農本主義批判は、マルクス主義と農本主義の敵対的関係を前提としている。それにしても、農民一揆と老農の関係については、検討の余地があるのであり、第二編の第一章第二節第二項において、再検討する。なお、マルクス主義と農本主義の相互批判は、第三編第二章で取り上げる。

この桜井と同様に、農本主義に対して否定的関心を鮮明に示したのは、網澤満昭『近代日本の土着思想 — 農本主義研究 — 』(一九六九年)である。網澤は論理的にも、感性的にも否定的であった。その理由は、父(網澤芳雄)が、農本主義によって、言語を絶する困窮と屈辱を受けたからである。父芳雄は、加藤完治の薫陶を受け、国策に順応し、第九次柳樹河開拓団指導員として、満州開拓に心血を注いだのであるが、結果はまったく悲惨なものであった。しかし、父も、父の同僚も、加藤を恨むこともなく、むしろ天職をまっとうできなかったと嘆いたのである(4)。

網澤は、そのような「精神はいったい誰によって、何によって養成されたのであるか(5)」と問う。こうして、網澤は、農本主義研究の動機を、農本主義に対する「憎しみにも似た怒りと、ついに帰らざる人となったあまたの同僚に対する生き残ったものの責務以外のなにものでもない(6)」と言う。網澤にとって、農本主義とは、「罪のない女、子供に生死の間をさまよわせ、それらの多大の犠牲の上にあぐらをかいて、生を享受していたもの(7)」であり、弾劾されるべきものなのである。

その他、いろいろな批判点が指摘されてきたが、それらを菅野正は、①「農本主義が、天皇制の体制擁護ないしはそれへの親近性をもって、ファシズムの温床をなしてきたことに対する批判」、②「農本主義は半封建的な色彩をもつ家族主義的小農経営を擁護する理論であるという批判」、③「農本主義のロマン主義的性格について」の批判、と整理している(8)。これらは、農本主義を批判する論者に共有されてきた基本的な批判点であろう。しかし、農本主義に対する全面的否定は、桜井武雄のみである。それ以外の論者は、何らかの方法的関心や肯定的価値関心を示している。菅野正は、①「戦前期、とくに昭和恐慌期から戦時体制期にかけての日本農村と農民生活のリアリティを把握するためには、どうしても農本主義を一つの重要な要因として捉えなければならない(9)」という方法的関心を示し、②「農本主義が内包するもっとも素朴な人間と自然との融合的な生活指向や人間主義的な価値関心などのなかに、われわれが見失った人間生活の基本的ありかたの一面を探し当てることができるような気がする(10)」として、「農本主義のなかに近代化批判の理論を求めることではなく、農本主義的な思考や心情のなかに、近代化批判の土台となりうる素材を探り当てる(11)」という評価的関心を示している。①の方法的関心については、筆者もまったく同感するものである。②については、農本主義における人間と自然との関係理解は、自然優位、自然と人間の融合、人間優位の三様があり、各種農本主義毎に異なるのではないかと考えている。それは、農業主義との関わりで、第三編の第一章第一節第一項において、検討する。また、農本主義の現代的意義に関しては、物質主義的価値関心に対する人間主義的価値関心を明確にしたことの意義とともに、現代の環境問題などが人間だけを地球の中心のように考えて、他の動植物との生態系の循環の視点を踏まえることが不十分であったことにも一つの理由が求められることを考えれば、農本主義がその人間優位主義も含めて、人間を絶えず自然との関わりの中で〈相対化〉してきたことが注目されるのである。

網澤も、桜井と異なり、農本主義を全面的に否定しなかった。網澤の場合は、農本主義を糾弾すればするほど、それに把捉された父の立場がなくなるのである。だから、農本主義という烙印を押された思想の中に、農本主義的ではない土着思想を峻別し、それを剔出しようとするのであろう。すなわち、二宮尊徳、老農たち、山

崎延吉、横田英夫、柳田国男の思想を、土着思想として、農本主義から分離するのである。網澤にしてみれば、この土着思想は、加藤完治の農本主義にも含まれるものであり、父が心酔したのは、加藤の農本主義に含まれる非農本主義的土着思想に対してなのである。こうして父の名誉を守りながら、非土着思想的農本主義を全面的に否定するのである。このように、網澤は土着思想に注目することで、「官学アカデミズムからは見むきもされなかった農本主義者たちの理論、思想が一般の耕作者にまで深く浸透していた理由(12)」を探る。こうして、農本主義を、支配者のイデオロギー、資本のイデオロギーとしてのみ捉えるのでは、「農本主義思想自体の内在論理、その思想のもつ実利性、実践性は看却され(13)」てしまうと考える。そうした「実利性、実践性」を山崎延吉に見るのである。山崎は、「日本の農村の現実をふまえ、伝統的共同体を解体するのではなく、ある限界内ではあるが、農家経営、農村経営、組合経営、というような生産、販売、消費という問題を総合的に受けとめ、新しい村を経営する方法を考え、そしてそのためには伝統的モラルを再訓練して、自己献身的農民魂をもって農村を建設していこうとした(14)」のであった。つまり、山崎のプラグマティックな側面が、耕作者に浸透した根拠だと見る。こうして、網澤は、精神主義的な農村救済方法が説かれることが多いなかで、山崎が「合理的、実利的観点からの打開策(15)」を考えたことに注目するのである。ただし、本論文においては、農本主義は、精神主義的傾向を有するものでさえ、合理的視点を内包していると考えている。

また、網澤が注目するのが、横田英夫である。網澤は、「他の農本主義者が机上のみで農民の味方となり、しかし、それは客観的には体制イデオロギーの機能しか果たし得なかったのに対し、横田だけがなにゆえに農民運動へ突入していったのか。横田に対する興味はまさにこの点にある(16)」と言う。この横田は、「権力の本質も天皇制国家の階級的性格も語ることはなかった(17)」が、小作人の圧倒的な支持を受けたのは、「日本のマルクス主義が犯してきた日常的思惟と理論とのギャップを横田がある意味で埋め合わせていた(18)」からだと言及する。つまり、小作人が望んでいたのは、「高遠な理論でも学説でもなかった。それは小作料減免という実に日常的要求であった(19)」と言う。これが、網澤が横田を高く評価する理由である。この横田に関しては、農本主義者と農民組合運動家のいずれの側面に本質を見るのが問題とされるが、本論文においては、横田と平田安治(東亜連盟荘内支部事務長)を、〈農民組合運動と結び付いた農本主義〉として取り上げている。

さらに、網澤は、横田や「山崎の思想が底辺に達することのできた耕作農民側の内的契機を柳田民俗学をてがかりに追究(20)」しようとする。網澤の第一の注目点は、柳田が農本主義者の精神主義を批判した点である。網澤によれば、柳田は、「正直で勤勉である小農商工業者に不足しているものは、ただ物的条件のみである

(21)」との観点から、「小生産者自立のための産業組合」を求めることで、「資本主義発展のもとで犠牲になっていく、小農商工業者、特に小農を精神主義から救済しようとした(22)」のである。第二の注目点は、柳田が、農本主義は資本主義発展と国民統合の観点からのみ共同体を重視した、と批判した点である。すなわち、柳田は、「常民が長期にわたって支えられ、勇気づけられてきたものを大切にし、荒れ狂う資本主義の波のなかでの役割を発見しようとした(23)」のである。そこで、それに沿うように、報徳社自身の組合化を図り、「報徳社自身を協同組合として生かす方向を模索した(24)」と見る。さらに、柳田が「念頭においていたのは報徳社のみでなく、農村社会に古くから存在するゆい、手間替、部落単位の共同作業など、また災害に対する共済組織もそうであった(25)」のであり、そうしたものを「蛆虫同然に扱う日本のエセマルキストに対する攻撃(26)」を行ったことを、網澤は積極的に評価するのである。このように、網澤は、柳田が精神主義を退けながら、「日本の伝統的精神構造から、価値の萌芽を発見し、掘おこし、それを新しい価値に変化させようと努力した(27)」ことに注目するのである。柳田の主張は、農政学を構想した官僚時代と民俗学を構想した脱官僚時代において、その論調が異なっていることを考慮し、本論文においては、三期に分けて、客観主義的で非農本主義的姿勢から耕作農民の内在的理解の方向へと向かう過程を考察する予定である。なお、筆者は、ことさらに精神主義を批判した点に柳田の意義を求めるより、網澤の第二の注目点、すなわち、内省的方法を用いて耕作農民の心奥に迫り、農本主義の基礎構造をなす耕作農民の〈心持ち〉に迫ったことを重視するべきであると考えている。

また、奥谷松治は、戦後にも農本主義が存在するとし、それを「民主主義的農本主義思想(28)」と呼んだ。すなわち、「天皇制の崩壊により、従来農本主義思想に絡みあったその側面が一応解消した。従来のそれと区別するために、民主主義的農本主義思想と名づけた理由がここにある(29)」と説明している。また、「農本主義と天皇制の両者が不可分の関係であるかのごとく意識されているが、……天皇制が解体された後においても、その基盤に対応して農本主義思想が独自の存在する(30)」と考える。この民主主義という言葉に、否定的意味を込めているとは考え難いので、肯定すべき農本主義の存在を示唆したものと言える。しかも、奥谷は、農本主義を否定的に捉える根拠となる天皇制との関係を、不可分な関係ではないと言うのであるから、農本主義に認めた肯定的面は、戦後だから生じたということにはならないであろう。こうして、奥谷は、戦前の農本主義思想にも肯定すべき点を感じ取っていたことになる。それが何かに関する奥谷の説明はない。なお、農本主義と天皇制の関係は、農本主義の自然観の問題とも関わるが、筆者は、各種農本主義によって、天皇制との関連の仕方が異なるのではないかと考えている。しかし、ここでは、その問題には立ち入らない。

安達生恒は、奥谷松治「日本における農本思想の流れ」、および桜井武雄「昭和の農本主義」を検討し、「権力的把握のみに終始する裁断法では、思想のもつ多方向性が無視されることになる。農本主義思想は、……支配階級の側に奉仕したばかりでなく、時には人民の側にもっていかれて成果をあげた一面も存在する(31)」として、農本主義に肯定的な点を認めている。安達は、「農本主義思想の鼓吹者＝思想メーカーだけが問題にされており、農本主義思想の受けて＝思想を消化する側が問題にされていない(32)」と指摘し、農本主義が「農民大衆に受け入れられたのは、……農民の持つ発想と触れあうところがあったからだ(33)」と言う。こうして、

「農本主義思想の研究は権力的把握の立場からだけでなく、この思想における発想の変化とそれにとまう受けての変化という視点、この思想を貫く発想法と一般農民の日常的発想法との関係という視点から解いてゆくことが、農本主義論のもう一つの、そしてきわめて重要な課題となる(34)」と言うのである。安達の言う「人民の側にもっていかれて成果をあげた一面」を示すのは、「安藤昌益、明治の自由民権運動や昭和の農民運動における村段階での活動家たち、戦後の生活綴り方運動における東井義雄の思想など(35)」である。これらは「村落共同体のなかから自生的に生まれ、農民大衆の側に立って展開された(36)」と肯定的に評価すると同時に、農本主義的発想法(＝農民の日常的発想法)のため、安藤の思想は「急進的でありながら革命につながらない(37)」し、東井は「ズルズルと保守にすべりこむ(38)」として、その「思想としての限界」も指摘している。農本主義を、一般農民の日常的発想法との関係から捉えていく視点は、本論文においても重視すべき視点であると考えられる。なお、農本主義と自由民権運動の関わりについては、後述するように、前田正名などは敵対的な関係にあったし、農本主義は自由主義と対抗的であったが、中村亀太郎(作右衛門、東垂連盟荘内支部)などは自由民権派の鶴岡市議会議員であったのであり、一概には言えないようである。荘内地方においては、「御家禄派」と争った開明士族や農民たちの「ワッパ騒動」の動きは、その後の「御家禄派」と争った自由民権派の大地主平田家の平田安吉たち町方地主勢力の動きや、加藤完治派の山木武夫たち産業組合青年連盟の動きとも、気脈を通じるものがある。農本主義は、自由民権運動と結び付いたり、対立したりしており、そういう矛盾的な全体構造こそが解明されるべき課題なのである。

このように、農本主義研究は、天皇制支配の構造の把握(桜井武雄)、明確な意識を伴わない日本人の行動様式の把握(中野収)、農民生活のリアリティの把握(菅野正)、近代の超克(『伝統と現代』)、土着思想の剔出(網澤満昭)、人民的成果の解明(安達生恒)などの関心上、深められてきたのである。ここには、農本主義を天皇制国家の支配思想と見るか見ないか、そう見ない場合でも、日本人の思想(日本主義)と見るか、人民の思想と見るか、農民の思想と見るか、という違いがある。い

ずれにせよ、農本主義と天皇制イデオロギーの関連、農本主義と日本主義の関連、農本主義と人民主義の関連、農本主義と農民生活思想の関連など、農本主義の思想的性格の問題に、関心が寄せられてきたのである。ところが、これらは、それぞれ切り離され、相互に関連付けられることが少なかったのである。しかし、筆者は、それら諸問題を総合的に捉える土台として、耕作農民の基本的性格が据えられるべきだと考えている。筆者は、いずれか一つの側面のみを農本主義の本質と見る立場に立たない。むしろ、農本主義が〈矛盾性〉を有すること自体を、農本主義の本質として捉える立場に立っている。農本主義の〈矛盾性〉のみならず、〈多様性〉、〈非体系性〉、〈状況規定性〉などが、総合的に理解されなければならない。耕作農民の基本的性格を反映しながらも、具体的状況に応じて、具体的な社会勢力と結合することで、農本主義総体として、異なった階級の性格を有する〈多様性〉を示すことになる。こうして、農本主義は、天皇制支配の構造の問題と関連し、地主思想と結び付き、資本主義批判の思想と結び付き、近代思想と結び付くことが可能となるのである。農本主義研究への関心は、それらすべてを含むものでなければならない。

註

- (1) 桜井武雄『日本農本主義』、白楊社、一九三〇年、一頁
- (2) 桜井武雄『日本農本主義』、一九頁
- (3) 桜井武雄『日本農本主義』、一三頁
- (4) 網澤満昭『近代日本の土着思想 — 農本主義研究 — 』、風媒社、一九六九年、「まえがき」による。
- (5) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、九頁
- (6) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、一〇頁
- (7) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、九頁
- (8) 菅野正「農本主義について考える」、日本村落研究会編『村落社会研究』五号、農山漁村文化協会、一九九六年、一～二頁
- (9) 菅野正「農本主義について考える」、二頁
- (10)～(11) 菅野正「農本主義について考える」、三頁
- (12)～(13) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、九〇頁
- (14) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、九一頁
- (15) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、一一二頁
- (16) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、一三四～一三五頁
- (17)～(19) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、一三七頁
- (20) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、九〇頁

- (21) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、一五一頁
- (22) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、一五二頁
- (23) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、一五五頁
- (24)～(26) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、一五六頁
- (27) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、一五七頁
- (28)～(29) 奥谷松治「日本における農本主義思想の流れ」、『思想』四〇七号、岩波書店、一九五八年、一四頁
- (30) 奥谷松治「日本における農本主義思想の流れ」、三頁
- (31) 安達生恒「農本主義論の再検討」、『思想』四二三号、岩波書店、一九五九年、五九頁
- (32)～(34) 安達生恒「農本主義論の再検討」、六〇頁
- (35) 安達生恒「農本主義論の再検討」、六七頁
- (36)～(38) 安達生恒「農本主義論の再検討」、六八頁

第三章 農本主義の基本的性格と本質的役割の理解をめぐる

桜井武雄は、「封建制崩壊期の窮乏農村に、荒撫開墾・植林治水・耕耘培養・紛議鎮静・救恤施与・勤儉奨励等々の方法を以て、荒廃農村の復旧更生運動を指導した(1)」ところの、「全く封建主義に迎合せる老農の思想が生粋の農本主義(2)」であるとする。こうして、桜井によれば、農本主義の形成期は「封建制崩壊期」(＝「幕末維新前夜」)であり、農本主義の原型は勸農殖産の老農思想に求められる。したがって、農本主義の基本的性格と本質的役割に関する桜井の理解は、この老農の階級的性格と社会的役割に関する理解の中に示されることになる。その点で、まず老農の「多くはいづれも豪農・地主・村役(名主＝庄屋・組頭)等から出ている(3)」と指摘されたことが注目される。つまり、老農は耕作農民ではなく、耕作農民と封建権力を媒介するところの権力の末端に位置するものと考えられていた。換言すれば、桜井は、老農思想(＝農本主義)を、耕作農民の思想ではなく、封建権力の思想と捉えていたのである。この老農の社会的役割を、桜井は、「封建的緊縛化における農的労働力の鞏化に依拠し、アジア的零細農民経済の維持興復を企図(4)」し、農民一揆を鎮静化することだと見るのである。桜井によれば、こうした零細農耕の維持と政治的支配の安定化への貢献という老農の役割は、維新以後の日本資本主義の発展下においても、引き継がれていく。岡田温が、「小農制が日本の家族制度の基礎となり、国体護持の支柱であることを強調(5)」したことにも示されるように、零細農耕を維持しようとする農本主義は、家族主義(6)を通して天皇制支配を支えている、というのが桜井の見方である。換言すれば、天皇制国家の農民統制イデオロギーとして農本主義を捉える立場に立っているのである。こうして、桜井

は、「生粋の農本主義」である老農精神が、「勤・儉・譲」の三徳に総括され、二宮尊徳が国定教科書で重用されるといった形で、「修身教化イデオロギー」としての社会的・政治的役割を果たすことになったと考える。そして、明治政権は地租改正強行に伴う「農村危局」の切り抜けに老農を重用し、老農の組織として大日本農会が結成されたと見るのである。しかし、明治中期の「資本主義隆興期」になると寄生地主化が進み、西洋農学が重視されることで、「老農の凋落」が指摘されてくる。しかし、それは誤認だと言う。桜井は、明治末期の地方改良事業で再び老農が重用され、さらに昭和初期の「原始的蓄積期のそれをも凌ぐ農村危局」における農村経済更生計画で、農民道場が「老農精神の復活鍛錬場」の役割を担うことになったと捉える。

こうして、桜井は、「農本主義イデオロギーは、資本制生産関係の生成過程に於いて、くずれゆく封建＝農奴制関係の地盤の上に発生したもの(7)」であり、「封建社会もしくは農奴制社会は、農本思想の母胎であり、温床であった(8)」と考える。すなわち、桜井は、農本主義を、基本的に封建思想であると考えており、それ故、「今日の農本主義者は当時を暗黒なものとして描くことを欲しない(9)」と言うのである。しかし、はたして桜井の言うように、農本主義は基本的に封建思想なのであろうか。いましばらく、桜井の見解を見てみよう。桜井は、零細農耕が封建社会の根底をなす以上、封建的支配者(封建領主層)のイデオロギーはもとより、その代弁者である「御用学者」のイデオロギーも、農本思想であったのは当然であると言う。やがて、前期的資本の発展により、零細農耕の没落が進む。その危機意識が農本思想を農本主義へと対自化させるのが封建後期であり、それが「封建時代の農本思想」である。こうして、「ブルジョアの発展によって触発されるという矛盾の契機を見逃しては、農本主義の本質はつかめない(10)」と指摘される。だから、〈思想〉を即自的、〈主義〉を対自的と考えていたと言えよう。したがって、「封建時代の農本思想」という表現には多少矛盾が含まれるが、いまだ対自化の過程にあるという意味で、あるいは真の対自化は産業資本の発展によるという意味で、〈主義〉ではなく、〈思想〉と表現したものと思われる。そして、桜井は、対自化の過程にある「封建時代の農本思想」として、老農思想を挙げたのであった。したがって、封建領主層のイデオロギーである農本思想が、対自化の過程で、封建制下の「豪農・地主・村役」層という老農の思想として顕現した、ということになるのである。この見解は、二重に理解することが可能である。第一に、老農を封建領主層の一員と見て、老農思想も封建領主層の思想であると理解することができるのであり、桜井の理解もそれだと考えられる。しかし、第二に、「豪農・地主・村役」層が、同時に被支配者層の仲間としても存在し得た点を重視し、封建領主層の思想に漫然と包摂されていた老農思想が、封建領主層の思想とは異なるものとして自己

を自覚したと理解することもできるのである。こうして、桜井においては、封建思想一般と老農思想との関連の考察が、不十分なのである。

網澤満昭は、「ものいみした族長が新穀を食することにより、神になるという原始心性のなかにわれわれは農が国の本であるという思想の根源を見ることができる(11)」と言う。これは、「権藤成卿のいう社稷の観念にもつながるであろうし、稲を齋き祀る天皇をあがめたり、稲のツブに礼拝する橘孝三郎の精神もかようなもの(12)」である。網澤は、安永寿延の研究に依拠しながら、この「新嘗祭にみられる族長と自然の一体化が日本人の原始心性である(13)」と考える。族長とは天皇であり、「天皇と自然の一体化」とは「天皇制のはらんでいる自然な心性(14)」であり、「日本人の原始心性」とは「生活思想の根底にある日本の自然(15)」であった。こうして、「天皇制の一面である生活思想の根底にあるもの(16)」が追究される。その意図は、「(農本主義)思想のもつ多元性を認めるということと併せて、変革の論理との関連性について一つの検討をくわえること(17)」であった。すなわち、農本主義思想は「既存の社会に対して批判者としての能力を持ち合わせているし、権力に対する一つの抵抗殻の役割を演ずる場合もありうる。したがって農本主義思想の効力と限界を認識することは、きわめて今日の問題でもある(18)」と言うのである。こうして、網澤は、「日本人によってつくられている世界を創造の原理、あるいは変革の論理で説明していくことは不可能になる。生成ないしは分離の原理ではじめてとらえられることとなる(19)」と述べ、農本主義研究の方法にも言及する。網澤によれば、「生成の原理とは即自的な運動であって、どんなに否定が媒介しても、そのまま創造の論理、変革の論理を生みだしはしない(20)」のであり、「農本に関する諸々の思想は、ほかの近代思想に較べるとき、はるかに深く、広く一般民衆の内面に浸透しえたのであるが、その理由は、その思想が意識的であると否にかかわらず、生成の原理を内包していたことによる(21)」と言うのである。つまり、網澤は、天皇制と日本人の自然観は即自的に一体的であり、それを対自的な変革の論理によっては捉えられないし、変革できないと考えているのである。ここで網澤が言う農本主義は、土着思想と混然一体であるが、網澤は、非土着思想的農本主義を根底から破壊するために、農本主義の内在的理解が不可避と考えたのであろう。しかし、そうなると、農本主義を内側から破壊する力をも、生成・分離の原理の中に求めなければならなくなる。それはいかにして可能となるのかが問われなければならない。その点で、後述のように、網澤は、農本主義を滅私奉公的な考え方だと捉えており、その「公」が天皇制でなくなれば、「極端なナショナリズム」や「戦間的マルクシズム」のような他の何かに奉仕することにもなると考えているのである。生成・分離の原理に基づくところの、農本主義を内側から破壊する力の所在とは、そうした形で求められるのであろうが、その考察は、なお不十分であると言わ

なければならない。

さて、網澤は、こうした「日本人の原始心性」が、一方で土着思想、他方で農本主義という思想的表現を取ると考えるが、桜井が「生粋の農本主義」と呼んだ老農思想を土着思想に含め、その老農思想を明治官僚が利用して官製化したのが農本主義であると見る。すなわち、網澤は、農本主義の本流を品川弥二郎などの官僚農本主義に求めたのである。桜井は、官僚が老農思想を農政思想に移植する過程で、官僚農本主義自体が老農思想的な装いをとると見るが、網澤から見ると、老農思想は利用されたにすぎず、官僚農本主義こそが主役であった。そして品川たちは、国家権力の社会的基礎をなす中小地主および中間農民層の没落傾向に直面し、信用組合法案を練るのである。そこにおける品川たちの意図について、網澤は、「資本主義の強行的扶植育成のためには、高率地租の徴収が必要とされたが、その担当基盤の小農、小商工業者の没落を是が非でも防ぎ社会不安を解消することが緊急の課題(22)」であったと整理する。また、網澤は、産業組合が「地方自治制度確立の前提でもあった(23)」と指摘し、この「自治制定の政治的意味は、一方においては自由民権運動の嵐を防ぐに足る絶対主義的権力装置として、一元的支配機関を創出することであった。しかし、他方において、それは伝統的村落共同体の生活原理である非政治的情緒性を支配の基礎的素材として温存維持することを目的としていた(24)」と言う。つまり、網澤は、農本主義を、反農民的かつ反自由民権的な国家支配原理の一つの表現と捉え、生活原理を温存させるのも、その手段としてであると見るのである。さらに、網澤は、信用組合と報徳社の結合に言及し、『静岡県信用組合連合会創設二五年誌』をもとに、「信用組合と報徳社が同一思想的根源から出ている(25)」と言う。つまり、官僚農本主義が、「産業組合主義を最も之に近似する報徳社に注入(26)」したと見るのである。こうした農本主義と産業組合の結合による小農民救済の動きは、「日本資本主義発展の特殊性からくる必然的帰結(27)」であった。すなわち、網澤は、農本主義者が小農社会の温存を企図したと考え、その目的を、農村の購買力を低下させずに、都市の低賃金構造を確保するためだと見るのである。これは、網澤が、農本主義を資本主義の要求に呼応するものと考えたことを示す。したがって、農本主義に親資本主義的側面を認めたとと言える。だから、網澤は、農本主義者の資本主義批判を本質的なこととは考えないのである。

このように、網澤は、農本主義を近代思想と見ており、封建思想と見る桜井の視点と対照的である。それが、官僚農本主義への理解の違いとなって現れるのである。桜井は、官僚農本主義自体が半封建的性格を有すると考えるが、網澤はそうは考えない。すなわち、「政府官僚がいまだ独自の指導体制を確立せず、また独自の行政浸透のルートをもたない段階で、他方では在郷地主の手作経営が、まだかなり農村に根をおろしている段階で、民間有力者の支配機構に依拠して、行政支配を実行す

る必要があったため、地主が反政府的方向に走ることを防ぎ、勸農政策によって、政治から切り離し、農業技術面に関心を集中させておきながら、その上で地主層を頂点とする民間の組織を権力の側に接近させようと努力するという点に、本質があった(28)」と述べる。換言すれば、明治官僚は近代国家の中央集権体制を求めているのであって、官僚農本主義は近代的性格を有するものであるということになる。この官僚農本主義が、「産業組合を通じて、深々と耕作農民の心情に浸入していくことになった(29)」というのが、網澤の見方である。その過程は「ムラ秩序の再編過程であり、村落共同体的秩序原理の国家的規模への普遍化・拡大化でもあった(30)」のである。こうして、「隣保相助」が、「相互監視」や「無限責任」や「連帯責任」に転化される。「ムラ秩序の再編」とはムラ秩序の利用であり、利用可能となるように官僚農本主義がムラ秩序に作用することを意味していた。だから、官僚農本主義がムラ秩序によって作用を受けるのではなかった。網澤からすれば、たとえ農本主義に、農民心情に合致するものが含まれるとしても、それは官僚農本主義が仕込んだものなのである。

網澤は、この官僚農本主義の思想的特徴を、禁欲的人間観の内に探っている。網澤によれば、「農本主義者の一貫して説く理想的人間像は、労働の乱費を惜しまず、低生活水準に甘んじ、勤儉力業、国のために下積の犠牲をはらうことをもって、光栄とするといった精神構造の持ち主(31)」である。この人間像は、「時の支配者にとって実に望むべき人間像であった(32)」と考え、これを「労働至上主義」と言い、滅私奉公的職業観と捉えるのである。網澤は、この「農本主義者の禁欲は、表面は如何にも厳しくみえるが、深底にはオプティミズムが流れている(33)」と指摘し、「自己を全体の中に埋没させ、一つの社会有機体の中に細胞の如く埋没することによって、安心立命するということは、自己に対する厳しさはない(34)」と指摘する。その際、前述のように、「公を如何に把握するかによって、農本主義は極端なナショナリズムにも結びつくし、戦闘的マルクシズムに荷担する可能性をもっている(35)」と述べたことが注目される。これは、農本主義の持つ〈状況規定性〉の指摘であろう。このように、網澤にとって、農本主義の禁欲観とは、合理化そのものの拒否であり、私利私欲の排斥であった。農本主義者からすれば、私利私欲に捕らわれることは、西洋的唯物論の本質に他ならないのである。したがって、合理化とは、西洋的唯物論化をさしていると言える。また、農本主義の禁欲観には、「罪」と「恥」という不可分の意識が伴うと言う。「罪」とは共同体秩序を破壊することであり、「恥」とは共同体秩序からはみ出すことである。こうした「罪」と「恥」に基づく禁欲精神がもたらす職業観は、「ある範囲内での外面的奉仕の職業観が、その裏返しとしての、動物的衝動に近い利己主義的職業観以外のものではない(36)」と言う。こうして、網澤は、農本主義の本質を利己主義と捉える。つまり、滅私奉

公的農本主義が、実は利己主義であると言うのである。筆者も、農本主義を、単に滅私奉公的精神とは考えていない。農本主義にも主体性があるであろう。それが利己主義であるか否かは議論の余地がある。それはともかくとして、綱澤は、「この職業観にたつ限り、ある特定の状況面に徹底的に埋没し、時代とか組織とかを自己から切り離し、対仕事そのものに自己を定着させ、即ち自己を一度完全に物化させることによって、人間の弱さを守るということはできない。自らを非人間化することのできないということは、人間になるということもできないに等しいのである(37)」と結ぶ。非人間化することができなければ、人間になることもできないとはどういうことであろうか。そう考える主体が農本主義なのか綱澤なのか不明であるが、農本主義であろう。すなわち、利己主義を根底に持つ滅私奉公的農本主義においては、自己を非人間化することで、全体目的に奉仕する意義ある人間になれる、ということであろう。これは、官僚農本主義の官僚的サービスの心情を示すものでもあり、官僚農本主義と近代官僚制の関連が一つの課題となることを示唆するものであるが、本論文においては、立ち入らない。

奥谷松治は、農本主義を重農主義として捉える。重農主義は、「農業労働は他のすべての自立的経営のための自然的基礎および前提をなす(38)」と考えることで家族農業経営を理想化し、それを害する資本主義経済の発達を非難する。こうして、シスモンディエーの思想を引合いに、「農本主義思想の骨格は、一方には家族農業を理想化した社会構成があり、他方にはそのイデオロギーによる資本主義生産に対する感傷的批判がある。これが資本主義成立期における農本主義の思想構造である(39)」と言う。このように、奥谷は、農本主義を、世界的に見られる絶対主義の経済思想であると考えているのである。但し、日本の農本主義は、「農業革命を未経過のまま、それを基盤として急速に発達した(40)」ため、「その基盤に対応して、終始封建的観念によっていざ知られている(41)」のであり、「農本主義思想の成立はもともと封建体制の危機、すなわち商品経済の発達が一定の段階に達していることが前提(42)」であるとして、桜井武雄の見方を踏襲する。しかし、天皇制との関連では、農本主義が天皇制の一大支柱となったことを認めつつ、前述のように、両者を不可分の関係とは考えなかった。そして、「農本主義者たちが農民保護を説く理由に、農民が忍耐づよい勇敢な兵士の給源であることをあげる(43)」として、「農本主義思想のこの側面では、農民と思想的につながりをもたず、……(44)」と指摘する。このように、農本主義は一方で独占資本をつくりだす「培養基」となり、他方で独占資本をつくりだす「媒介体」である天皇制の基盤擁護の思想として展開された、というのが奥谷の見方である。このように、桜井と同様に、奥谷にあっても、農本主義は、農民との思想的つながりが薄いものと考えられ、独占資本や天皇制に利用される側面ばかりが強調されることになる。しかし、本論文においては、前述

のように、農本主義を、農民との思想的つながり(基礎構造)と独占資本形成の培養基や媒介体(応用構造)との関連において、理解すべきであると考えている。

安達生恒は、「農本主義的思考方法」と「農民の伝統的発想法」の関連を問題にしている。そこで、まず、農本主義に共通する発想法として、「郷土主義の論理」に注目する。それは、「社会とは、一村一家の共同体=郷土のこと(45)」であると考える「共同体的思考方法」をさしている。この「無規範の世界においては、制度、体制、生産関係などという市民社会的意識は生まれようがない(46)」と言う。したがって、この世界においては、「地主制度は農民支配の制度ではなく共同体的慣行なのであり、地主-小作関係は搾取関係ではなく親子関係なのである(47)」と指摘される。この「郷土主義においては、人間の心情と生活の価値が強調される(48)」が、その「生活とは生物自然の要求を満たすという意味での生活なのであり、近代合理主義精神を媒介とする市民生活とは認識の次元を異にしたもの(49)」である。したがって、「生活窮乏化の打開は、半封建的地主小作関係の打破には向かわず、勤労と節約の無制限の強調という枠内で、探し求められ、働き主義の方向で解決される(50)」ことになる。このように、安達は、農本主義を、〈共同体的思考方法=非市民社会意識=働き主義〉と考える。しかしそうすると、農本主義の勤労性とは、権利意識の未熟な前時代的思考ということになり、勤労を自己実現として捉える視点が後退することになる。

また、安達は、「郷土主義の論理はまた、特殊な形での自治主義と反中央集権という考え方に直接つながる(51)」と指摘する。なぜなら、郷土は「抽象概念ではなく、生物的生活の具体的処理を迫られる実在(52)」だからである。なお、安達の言う「特殊な形での自治主義」とは、「封建的ヒエラルヒーを丸ごとかかえ込んだ、地主階級による農民統治の手続き(53)」を意味し、「反中央集権」とは、共同体秩序の維持を意味している。さらに、安達は、「郷土主義の論理」には、「状況を分割して認識するという考え方が全然含まれていない(54)」と指摘する。すなわち、「状況そのものをさらに細かく分割し、その分割した特定の状況に自己を据えるという思考方法がないので、対立・抗争関係にあるものをも、反撥なく受け入れることになる(55)」と分析している。筆者は、農本主義には、小作的、地主的といった〈相互矛盾性〉があると考えているが、〈状況不分割主義〉という視点から見ると、階級対立が否定されるのであり、それらに相互矛盾・断絶はないのであった。こうした〈状況不分割主義〉は、「郷土主義という共同体的思考のなかに、人間は自然の一部であるという考えかた、自然を規範として人間がつかまれ、人間と自然の対置がなく、したがって対自然関係と対人間関係を同一次元でつかまえるという論理がひそんでいることに基づいている(56)」とされる。安達は、この郷土主義が、農民の伝統的発想法でもあったと考える。安達によれば、農民の伝統的発想法とは、

「これまでの生活のなかで、最も悪い生活条件を記憶の底にモノサシとしてもち、そのモノサシにひきくらべて、現在の生活の一分、二分の進歩をみて、現状を納得する(57)」という現状肯定の論理である。その結果、「不満は心情の力の発散に終わりがちで、主体的な組織的行動に高まらない(58)」のである。ここに、「体制イデオロギーとしての農本主義思想が農民自身によって受け入れられてゆく理由(59)」がある、と分析されている。安達の言う郷土主義の〈状況不分割主義〉は、本論文においては、耕作農民の行為様式として、生活や生産の全局面を考慮した〈総合的判断性〉として理解している。そして、農本主義が心情主義や精神主義に見えとしても、必ず農事改良などが組み合わされているのであり、本論文においては、農本主義を心情主義や精神主義であるとは考えていない。また、安達は、農本主義の役割を段階的変化として捉える。それは農本主義の歴史的展開の理解に関わるので、詳細については第二編で取り上げるが、安達の指摘する農本主義の役割をここで列挙しておけば、体制擁護思想の役割、国家千城思想の役割、地主・小作の階級対立を否定する役割、社会不安を非常時局へすりかえる役割などがある。これらは、安達にとって、「徂徠系統の農本主義思想」の役割であった。これと区別して、「人民の側にもっていかれて成果をあげた一面」を強調したことは既に触れた。その研究は安達の課題でもあり、ここで具体的に検討することはできない。

筑波常治は、農本主義の「農」は農業をさすのではなく、「自然にしたがって生きる生き方を、農という文字に込めて表現したものではないか(60)」と述べ、農本主義を封建的イデオロギーと見る立場を批判している。筑波によれば、こうした「自然にしたがって生きることを幸福とみなす発想は、大自然の暴威によって徹底的にうちのめされた体験をもたない民族の感覚である。そこから発した日本人の自然観は、一方に自然に対する甘えた信頼があり、他方に人力に関する過剰の自信がある(61)」のである。これが、「農村につたわる伝統的な土着の思想(62)」なのである。この土着思想は、地方農村の出身であり、農業との接触が密接であり、肉体的力の意味が大きい武士たちにも継承されており、それを土台に、仏教、儒教などを加え、武士道が確立されたと言うのである。この「武士道を基本にした農民道徳の確立が、武士階級のイデオロギーをなす学者たちによって試みられた(63)」のであり、それが農本主義であるとされる。こうして、農本主義は、「武士の生活の安定のために、農村から年貢を遅滞なく納めさせ、さらに可能なかぎりその額を増大させよう(64)」とするものであった。その目的のために「農民に要求されたのは、第一に生産生活における勤労の強化であり、第二に消費生活における儉約の強制だった(65)」と指摘する。このように、農本主義は耕作農民に儉約を実行させることで、彼等の勤労に基づく収穫の増大分の収奪を可能とさせるものであった。筑波によると、「勤労は、無制限に強調された(66)」のであり、「人力にかんする、楽天

的信頼こそ、そういう発想を可能にした(67)」のである。そして、「労働は苦しいに違いないが、苦痛なことを進んでやることこそ、人間の道として尊いのだという道徳(68)」を持ち出すことで、「本来、生産の手段にすぎなかったはずの労働が、それじたい修養という独立した目的をあたえられた(69)」と言う。修養にとって、功利や計算は排斥されるべきものとなる。「商人階級にたいする防波堤の役割を持つ農本主義にとって、この利潤の概念の疎外は歓迎に値する帰結(70)」なのである。この「計算の概念のないところ分業という様式がきわめて育ちにくい(71)」のであり、「自給自足という形態こそ農本主義の理想(72)」なのである。また、「勤労と儉約の強制にたいする農民の不満を回避する方法として、武士たちもみずからまた、それを実行しなければならなかった(73)」ことに示されるように、「自分の務めをつくす精神に尊い卑しいの差別はない」とされる。こうした「階級・制度上の違いを、努力・精神という心がまえの世界の同一性によって帳消しにする。階級的な区別から……心情面での絶対的な平等をみちびきだす。そこに、農本主義道徳の本領がひそんでいた(74)」と分析されている。筑波によれば、明治天皇と二宮尊徳は農本主義のシンボルとされ、最上層と最下層が農本主義道徳の実践者として、同一次元におかれることで、階級的対立を道徳的心情で消去させたのである。このように、農本主義の非階級的考え方を、安達は自然を規範とする〈状況不分割主義〉から説明し、筑波は〈自然への甘え〉と〈人力への過信〉から説明している。どちらも、農本主義を自然優位主義と見ることを立論の基礎にしているのである。しかし、本論文においては、農本主義が、すべて自然優位主義であるとは考えていないことは、既に述べた通りである。そもそも、農本主義の非階級性は、村落協調主義のように、基本的には、仲間内の協調をさしている。階級対立の隠蔽とはいっても、実際には耕作地主の容認であり、村落に不在の寄生地主に対しては、批判的であった。資本家に対する批判も一貫している。さらに、農本主義における権力との関係も同様ではないのであり、安達や筑波の議論は、なお検討の余地があると言わなければならない。

菅野正は、農本主義の内容を、①「農が国の本であり、土台であるという思想と心情(75)」、②「農を通して自然とともに生き、自然に帰るのが人間本来の生き方なのだという考え方(76)」、③「大地を耕し額に汗する勤労こそが、人間の一番美しい生き方であり、人間的価値の根源であるという価値観(77)」、④「家族主義的小農経営を前提とし、それを維持強化するための思想(78)」として捉える。このように「農本主義は、日本人が農耕民族として定着して以来、一つには、自然と人間との農耕的融和と共存の思想として、もう一つは、被支配者としての農民のアイデンティティの拠り所として、それぞれの地域の農民生活のなかにその形成基盤があった(79)」として、農本主義を「農民の心情的レベルのもの(80)」と捉える。これ

が「近代に入って、国家統治の手段として政策のなかに組み込まれた歴史を持つ(81)」が、「国家支配に組み込まれた姿が農本主義のすべてではないし、そういう形をとった場合でも、国家支配への組み込まれ方は、子細にみると、各地域の農民生活の実態に応じてさまざまである(82)」と指摘する。このように、菅野は、農本主義の本質を、自然とともに生きるという農民の心情に求め、それが一方で国家政策に組み込まれるが、他方で「農民生活の地域的・伝承的特性は、根底的なところでかなり根づよく生き続けた(83)」と見るのである。本論文は、菅野のこのような問題意識を継承しようとするものである。

このように、農本主義の本質については、第一に、桜井武雄、奥谷松治のように、ストレートに天皇制支配の思想と捉える立場がある。すなわち、①桜井は、農本主義を基本的に封建思想(老農主義)と捉え、②奥谷は、絶対主義思想(重農主義)と捉えている。第二に、筑波常治、安達生恒、網澤満昭、菅野正のように、自然観から説く立場がある。これも、各人各様である。①筑波は、農本主義を、武士道を基本に、農村に伝わる伝統的土着思想を取り込んで組み立てられた農民道徳として捉える。だから筑波は、農本主義を基本的に支配者の自然観に基づくものと捉える立場に立っている。②安達は、体制イデオロギーとしての農本主義と農民的発想を区別しながら、両者をつなぐものとして郷土主義を検討する。ここで共通項となる郷土主義とは、基本的に農民の自然観であって、権力の自然観ではない。したがって、安達は、農本主義を基本的に農民の自然観に基づくものと捉える立場に立っている。③網澤は、日本人の原始心性を持ち出すが、それは農民の自然観であった。それを農民的に表現したものが土着思想であり、権力的に表現した農本主義とは別物と考えている。だから、網澤は、農本主義を、権力の自然観に基づく権力思想と捉える立場に立っている。論理上、網澤にとって、権力の自然観は、農民の自然観を利用してはいるが、非農民的自然観である。④菅野正は、自然とともに生きるという農民心情、すなわち農民の自然観を農本主義と考えるが、それを利用したところの国家・農政に取り込まれた支配思想をも農本主義に含めて捉える。だから、菅野は、農本主義を農民の自然観と権力の自然観の両方から捉える立場に立っているのである。

註

- (1) 桜井武雄『日本農本主義』、白楊社、一九三五年、四～五頁
- (2) 桜井武雄『日本農本主義』、一九頁
- (3) 桜井武雄『日本農本主義』、八頁
- (4) 桜井武雄『日本農本主義』、九頁
- (5) 桜井武雄『日本農本主義』、四三頁

(6) 本論文においては、農本主義者たちも「家族」という言葉を用いているので、「家族主義」とした。その意味するところは、「家」である。

- (7) 桜井武雄『日本農本主義』、七二頁
- (8) 桜井武雄『日本農本主義』、七三頁
- (9) 桜井武雄『日本農本主義』、七六頁
- (10) 桜井武雄『日本農本主義』、七四頁
- (11)～(12) 網澤満昭『日本の農本主義』、紀伊国屋書店、一九八〇年、一〇頁
- (13) 網澤満昭『日本の農本主義』、一一頁
- (14) 網澤満昭『日本の農本主義』、六頁
- (15) 網澤満昭『日本の農本主義』、五頁
- (16)～(17) 網澤満昭『日本の農本主義』、六頁
- (18) 網澤満昭『日本の農本主義』、七頁
- (19)～(20) 網澤満昭『日本の農本主義』、一一頁
- (21) 網澤満昭『日本の農本主義』、一一～一二頁
- (22)～(24) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、一八頁
- (25)～(26) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、一九頁
- (27) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、二八頁
- (28) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、一八一頁
- (29)～(30) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、三〇頁
- (31) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、二〇三頁
- (32) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、二〇四頁
- (33)～(35) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、二〇五頁
- (36) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、二〇七～二〇八頁
- (37) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、二〇八頁
- (38) 奥谷松治「日本における農本主義思想の流れ」、『思想』四〇七号、岩波書店、一九五八年、一頁
- (39)～(43) 奥谷松治「日本における農本主義思想の流れ」、三頁
- (44) 奥谷松治「日本における農本主義思想の流れ」、四頁
- (45)～(53) 安達生恒「農本主義論の再検討」、『思想』四二三号、岩波書店、一九五九年、六五頁
- (14)～(59) 安達生恒「農本主義論の再検討」、六六頁
- (60) 筑波常治「日本農本主義序説」、『思想の科学』一八号、中央公論社、一九六〇年、四頁
- (61) 筑波常治「日本農本主義序説」、五頁
- (62)～(66) 筑波常治「日本農本主義序説」、六頁

(67)～(74)筑波常治「日本農本主義序説」、七頁

(75)～(76)菅野正「農本主義について考える」、『村落社会研究』第五号、農山漁村文化協会、一九九六年、四頁

(77)菅野正「農本主義について考える」、五頁

(78)菅野正「農本主義について考える」、六頁

(79)～(83)菅野正「農本主義について考える」、七頁

第四章 農本主義の歴史的展開の理解をめぐる

ここでは、登場する農本主義者の思想内容を検討することが課題ではない。それぞれの農本主義研究が、農本主義の基本的な流れをどう捉えているかを整理・検討することが課題となっている。まず、桜井武雄は、「農本主義が、その本来の苗床たる封建社会から、転形期官僚の手を通じて資本制社会へ移植され、やがて今日の如き変質の乱生をみるに至るまでの歴史的展開(1)」の過程を検討するが、それは、「生粋の農本主義」であった老農思想が、「後の日本主義に継承発展せられた(2)」過程である。継承発展とは、基底に不変なものが想定されながら、表層が発展するということであろう。その不変なものの実体は、零細農耕であった。それに立脚する老農思想が、「官僚型農本主義」として農政に移植され、やがて、その系統が「日本主義」へと変質の乱生をみるというのが、桜井の捉え方である。その段階区分であるが、桜井は、農本主義の存続時期を半封建的零細農耕の存続時期と見ており、その段階区分を「ブルジョア的発展」の度合いから行い、①「封建時代の農本思想」、②「原始的蓄積時代の農本思想」、③「資本主義興隆期の農本主義」、④「昭和の農本主義」を区分している。

まず、「封建時代の農本思想」についてであるが、桜井によれば、封建主義イデオロギーとは、本来「農本」思想であった。本来そうであったのだから、それは即自的な封建的農本思想であった。しかし、既述のように、前期的資本の発展により零細農耕の没落が進むことで、危機意識が生じ、それが対自的な封建的農本思想を生むと見る。具体的には、荻生徂来(3)と山片楠桃の農本思想をさしている。この対自的な封建的農本思想(教学的農本主義と呼んでおく)と老農思想の関連の追究が不十分であるが、桜井は、御用学者の農本思想が封建主義イデオロギーの自覚的代弁として現れ、老農思想はその自覚的実践の思想であると捉えており、両者とも、「商業資本・高利貸資本の侵蝕から零細農耕経済を擁護(4)」する「農一切主義」の思想として、同質であると見ていたと考えられる。

桜井は、これが「原始的蓄積時代の農本主義」に変質すると考える。「原始的蓄積時代」とは、明治維新後から明治二〇年代までの時期をさし、「転形期官僚の農本主義」の時代をさしている。この官僚農本主義は、「封建的支配体制の妥協的解

体の上に、それ自身ブルジョア的発展の一所産として成立した明治政府官僚群(5)」によって、教学的農本主義と老農思想が農政に移植されたものであった。これを桜井は、「騎士の手に握られたむち(6)」と表現している。彼等「明治政府官僚群の歴史的使命は、原始的蓄積の強行による資本の温室的補助育成(7)」にあるが、同時に、「官僚の農本思想の本然は、自己自身の立脚地盤たる半封建的農村体制の堡壘の擁護にある(8)」として、そこに「矛盾原理」が指摘される。これが、官僚農本主義の動因と考えられている。そして、「封建時代の農本思想」との関連については、「封建時代の農本思想が……農一切主義を主張したのに対して、この期の農本主義に至っては、……商工の発展に跛行し取り残されんとする農業を保育助成せんとした(9)」点に、変質を確認するのである。つまり、官僚農本主義とは、商工発展というブルジョア的要求と、農業保育助成という零細農耕保持の「相反する二潮流を統制し、リードせんとした(10)」ものであり、そのために、地租改正や勸農策に老農が重用されたと見るのである。確かに、桜井が言うように、〈農一切主義〉に比べ、農業重視の度合いが落ちている。この官僚農本主義として、桜井が取り上げたのは、大久保利通、井上馨、松方正義、谷干城、品川弥二郎、平田東助であった。そして、彼等の農本思想の推移を、ブルジョアの農業改革論を小農論が圧倒する過程と見るのである。すなわち、「開明派官僚」の大久保、井上、松方は農業近代化、大農論を主張するが、やがて、「保守国粹派」の谷、品川、平田の独立小農論に圧倒されたと指摘する。そして、「井上のかかる大農論の基調=精神はどこに在るか？それはほかならぬ彼の官僚的農本主義であった(11)」と言う。すなわち、桜井は、井上が、寄生地主を大農法に移行させ、官僚の堡壘とすることをめざしたと見るのである。なお、「開明派官僚」を農本主義者と見たことは、桜井が農本主義理解に、小農主義だけでなく、大農主義も含ませていたことを意味することになる。勿論、小農主義の官僚農本主義を主流と見てはいるが、いずれにせよ、桜井の言う官僚農本主義とは、大農であれ小農であれ、農業経営に官僚の堡壘を求める考え方をさしているのである。しかし、本論文においては、大農論は農本主義には含めていない。それにしても、「開明派」であれ「保守国粹派」であれ、彼等官僚の思想が老農思想と同質であるとは考え難いことである。網澤満昭のように、官僚農本主義を老農思想とは異なるものと考えた上で、その関連を探る方法も有意義であろう。前述のように、桜井においては、対自的な封建的農本思想と老農思想の関連の究明が不十分であったが、同時に老農思想と官僚農本主義の関連の究明も不十分なのである。

そして、「資本主義興隆期の農本主義」であるが、この時期は「産業資本確立期」であり、明治三〇年代をさしている。この時期、「産業革命の進展と共に、商品経済と独占資本主義の農村侵入は、半封建的零細農耕経済の基礎を揺るぎ、農民層の分解を促し、かくして半封建的土地所有=半封建的農村組織のcliseを現出する(12)」

のである。桜井によれば、これに危機感を抱くのが、地主および地主が送り出した官僚や農学者である。こうして桜井は、横井時敬、河上肇、酒匂常明の思想を取り上げる。桜井が目にしたのは、横井が、「商工は国を富ます所以にして農は国を守る所以なり(13)」として、「農商工の鼎立共進」を主張した点である。これを桜井は、「対農策よりしてこれを見れば、明治前期の農本主義者がまがりなりにも農業振興＝農業資本主義化策を主張し得たのに対して、反対にここでは、農業＝農村の資本主義化を恐れて、ひたすら農業旧態の保持を念願としてゐる(14)」と分析する。すなわち、〈農一切主義〉や、〈商工業に立ち遅れない農業を〉、という以前の農本主義の主張と比べて、農業重視の度合いが一層落ちていると見るのである。そして、桜井は、河上も同列に置く。すなわち、桜井は、河上が日露戦後の工商偏重の賤農主義を批判して、「国民経済の発達に農工商の三者をして能く其の鼎立の勢を保たしむるに在り(15)」との立場から、「国威の発揚は商業の隆盛を来し商業の隆盛は農業の頹廢を招き、而して農業の頹廢は遂に国家転覆の原由たるに至る(16)」と指摘した点を捉え、横井と同じ「農商工の鼎立共進」論者であると見るのである。そして、「ブルジョア・イデオロギーの一員の一典型(17)」である酒匂常明のブルジョアの農本主義が指摘される。酒匂は、商工業の発達の根拠を安価な生産費に求め、その理由を、小工業、家庭工業という農家副業と、農村から流出する低賃金労働力に求めていた。こうして、商工業発展の原動力は農業であると主張するのである。酒匂の主張は、確かに桜井が言うように、農業重視の度合いがまったく落ちているのであり、〈重商主義〉であると言えよう。さらに、桜井によれば、彼等の農本主義は、①食料自給上から、経済上の国粋主義を強調し、②農夫は強兵の源泉であるとして、軍事国防上の観点を強調し、③社会主義の防波堤の観点を強調する点で、共通していた。こうした考え方だけでは、本論文においては、農本主義に含めてはいない。

さて、明治四〇年以降、「中小農没落必至化(18)」傾向が顕著となり、中小農の見地から、小ブルジョア農本主義が登場すると指摘される。桜井によると、大正期には横田英夫の「中農的農本主義」が出るが、さらに、昭和恐慌期、そして非常時の時代に入り、動揺性、焦慮性、空想性を伴う、急進的な「小ブルジョアの農本主義」が登場する。その典型が、権藤成卿と橘孝三郎の農本主義であった。この非常時の小ブルジョアの立場に対し、非常時の地主の立場に立った農本主義が区別される。それが、「地主＝村塾型農本主義」(山崎延吉、加藤完治)や、「地主＝帝農型農本主義」(岡田温)である。そして、「新官僚型農本主義」(後藤文夫、安岡正篤)が両者にまたがり、両者を農村自力更生運動という国策に統合していったと見るのである。これが「昭和の農本主義」である。さらに、桜井は、戦時体制への突入に伴い、国防上の観点から、軍部の農本主義(谷干城、清水盛明)が台頭したと見るの

である。

以上のように、桜井の言う老農思想の日本主義化とは、①大久保、井上、松方、品川、後藤、安岡たちの官僚農本主義化(農本主義の農政化)、②横井、河上、山崎、加藤、岡田たちの地主的農本主義化、③横田、権藤、橘たちの小ブルジョア農本主義化、④谷、清水たちの軍部農本主義化、という四つの変化をさすのである。

網澤満昭は、『近代日本の土着思想』(一九六九年)において、既述のように、農本主義の原型を、品川弥二郎などの官僚農本主義に求めていた。それは、土着思想である老農思想を官製化することで成立するのである。網澤は、この「老農の論理的特色はなんといっても没政治性である。この没政治性のゆえの政治性によってのみ体制擁護のイデオロギーとして機能した(19)」と分析する。この「明治前期に有力な存在であった豪農層は二十年代以後次第に寄生化していく(20)」のである。こうして、老農は地主となり、老農思想は地主思想となる。だから、網澤にとって、官僚農本主義の展開は、老農思想の官製化から、地主思想の官製化への展開をさすものと考えられる。しかし、この地主の論理的特色は、没政治性ではないであろう。地主は、明確な「体制内存在」として、政治性を発揮している。さて、網澤は、この「地主的農政の理論的よりどころとなったのが横井の農本主義であった(21)」と捉えている。だから、横井時敬の農本主義は、老農利用型官僚農本主義が地主利用型官僚農本主義へと展開した姿を官学アカデミズムにおいて表現したものであるということになる。すなわち、横井の農本主義は、地主の政治性が官僚の政策理念に反映したものということになるのである。こうして、網澤にとって、官僚農本主義は、品川たちの官僚農本主義から、横井の地主的農本主義へと展開すると捉えられていると言えよう。しかし、そのような展開の整理は、適切ではない。なぜなら、後述のように、横井は非農本主義であったし、小作農本主義である革新官僚農本主義もあったからである。また、網澤によれば、この官僚農本主義は、さらなる展開において、岡田温の「正統派農本主義」となる。安岡正篤の農本主義もこの系統に位置づけられている。こうして、農本主義は農村経済更生運動に貢献するが、そこに老農精神が利用された根拠として、網澤は二点を指摘する。第一点は、「老農精神は負債整理に好都合であったからである。というのは、老農の論理の中に見られる没政治性、経験偏重主義、科学性拒否、勤勉推譲などの徳目がすべて窮乏化からの消極的(体制変革なし)の脱出に適していた(22)」ということである。第二点は、「農業ブルジョアジーとしての上昇が特殊日本の状況によって早期に封鎖され、官僚的支配機構のもとに把握される過程で、市民社会のトレーガーとなりえなかったところにある。老農は寄生地主化のもとで、地主－小作関係を含む共同体的な小宇宙の主人公と化し、封鎖的保守性を持ち、郷土意識を通じて上からの体制イデオロギーの使徒の役割を果たした(23)」ということである。しかし、岡田の農本主義は、

「農村経済更生計画の行きづまり、経済更生運動から精神更生運動への転換、その満州侵略移民運動への飛躍という状況変化(24)」において、非常時に合致できなくなり、加藤完治の精神主義的「神がかり的侵略的農本主義」、あるいは権藤成卿や橋孝三郎の「小ブルジョア・インテリの農本主義」に官僚農本主義としての主役の座を移して行くと見るのである。しかし、『近代日本の土着思想』においては、岡田、安岡、加藤、橋、権藤などに関して、その検討を行う独自の章が設定されておらず、彼等の農本主義と官僚農本主義との関連の追究は不十分である。むしろ、綱澤にとっては、章を設定された山崎延吉、横田英夫、柳田国男への流れが重要であった。それは、土着思想の系統であり、山崎から横田へと次第に農本主義が自己否定に向かい、柳田に至って明確に否定されたと捉えられている。しかし、その過程は、農本主義の深底に存在する耕作農民の基本的性格が浮かび上がってきた過程であると見ることもできるのである。本論文においては、そのように見ている。

また、綱澤は、『日本の農本主義』(一九八〇年)において、封建社会の思想的支柱をなした朱子学が、「將軍を頂点とし、最下端に土地に緊縛された農民の広汎な層をおく階層秩序を自然的秩序として理論づけ(25)」たように、農政思想も、「それに準じて構成され(26)」たと指摘する。こうして、「朱子学の支配する風土の中で、農本思想は温かくぬもっていた(27)」が、幕末の封建危機で、目を覚ます。それが、①荻生祖来の「儒学派農本思想」(危機の取り繕い)、②安藤昌益の「体制批判のための農本思想」、③二宮尊徳の「農民生活と直結した」農本思想であると捉える。こうして、従来の儒学派農本主義は、品川、横井、岡田、安岡といった流れで、支配思想としての官僚農本主義を構成し、その非常時の形態として、権藤、橋、加藤が位置づけられる。安藤の反体制農本主義は変革思想へ展開するが、具体的に誰の思想に受け継がれて行くのかは、言及されない。恐らく河上が位置するのであろう。二宮尊徳の生活思想は、老農、山崎、横田、柳田といった流れで、土着思想へと展開すると捉えられているのである。

安達生恒は、農本主義の「発想の変化と受けての交替」という視点から、農本主義の歴史的展開を考察する。まず、「体制擁護思想としての農本主義を、もっとも古典的な姿で示すのは、……荻生祖徠の考え方であろう。これが明治の本源的蓄積期において、前田正名、品川弥二郎などの絶対主義官僚により、農業は国家の基礎産業であり農民は国家を支える土台だ、といういいかたで、あらためて固定される(28)」と捉える。この官僚農本主義を、桜井や綱澤と同様に、「荻生系統の農本主義」と見ているのである。そして、安達は、官僚が「農本」を実感する根拠を、地租の持つ国家財政上の重要性に求める。また、村落指導層としての老農＝手作り地主が、自作農没落の現実があっても、「農民が国家の土台だ」という考え方を受容する根拠を、彼等が農村に在住し、農業生産に深く参与していたことに求める。し

かし、「明治三〇年代に入ると、農業に対する工業の決定的優位性が確立し、地主階級の全面的寄生化がはじまる。……もはや農業が国富の形成という意味で国家の基礎産業であるといういいかたは、すなおな形では通用しえなくなる」。この状況変化に対応して、農本主義も姿を変えてくる、と安達は考える。すなわち、「農業重視の立場が、国富増進という積極性を捨てて、国の産業の全部が商工業化すると国民は食ってゆけなくなるから農業はいぜんとして大切だ、という発想への切りかえである。国富増進事業としての農業から、国民食糧供給産業としての農業への、意義づけの転換である(29)」と指摘される。加えて、「国防的あるいは軍事的意義づけを新しく付与する(30)」のである。この国防的意義づけは、谷干城、横井時敬の農本主義に指摘される。そして、第一次大戦から昭和にかけて、農村では「経営規模の全般的萎縮と農民各階層の下落傾向(31)」が生じ、小作争議が激化する。そこで、「支配階級の緊急課題は、小作争議による下層農民の階級的攻勢から中小地主と農民上層を守り、地主制自体の危機を回避すること(32)」に置かれるが、それと関連して、安達は、「農本主義思想が、地主-小作の階級対立の否定という点に焦点をしばりなおし(33)」たと指摘する。それが、岡田温の「階級対立の否定と農村内部の矛盾を都市対農村という関係にそらす観点(34)」からの農本主義である。しかし、昭和の農業恐慌は小作争議をますます激化させ、「この社会不安を非常時局という感覚にすりかえてゆけなかに農本主義思想においても、権藤成卿や橋孝三郎などの右翼狂信主義者の発想が優位をしめてゆく(35)」と捉える。そして、彼等の運動が「経済更生の面でゆきづまると、そのゆきづまりをおおう形で大びらな精神作興運動が展開され」、加藤完治の農本主義が、「従順な精農型農本主義者の集団的育成(36)」を行うと捉えるのである。こうして、「岡田温や山崎延吉的な農本主義の発想はファシズムのそれに席をゆず(37)」ることになると言う。このように、安達は、「品川、前田、一木、岡田(良)、横井から山崎延吉、岡田温を経て権藤や加藤のファシズムに流れ込む徠徠系統の農本主義思想(38)」を主流と見る。一木とは一木喜徳郎であり、岡田(良)とは岡田良平である。しかし、既述のように、安藤昌益、自由民権思想、農民運動、生活綴り方運動などに、徠徠系統とは異質の、いわば人民主義的農本主義を見ていたのであるが、その歴史的展開については言及していない。

以上の、桜井、綱澤、安達の農本主義の歴史的展開に関する理解を比較検討して、共通点と相違点を見出し、何が課題となるかを考察する。まず、彼等が取り上げた主要な農本主義者を分類し、農本主義研究の研究対象者を確認する。それは、①老農(二宮尊徳、中村直三、岩谷九十老、小柳津勝五郎、岡田良一郎、奈良専二、船津伝次平)、②学者(儒学の荻生祖徠、山片福桃、太宰春台、安岡正篤、神道の加藤完治)、③官僚(大久保利通、井上馨、松方正義、品川弥二郎、前田正名、酒匂

常明、後藤文夫、岡田温、石黒忠篤)、④軍部(谷干城、清水盛明)、⑤学者(新渡戸稲造、横井時敬、河上肇、那須皓)、⑥社会運動家(安藤昌益、山崎延吉、横田英夫、権藤成郷、橋孝三郎)と分類できる。安岡正篤や加藤完治は⑥にも含まれるというように、いくつかの分類にまたがる場合も多いが、筆者の主観的判断で分類している。また、これまでの農本主義研究で取り上げられなかった農本主義者として、菅原兵治(篤農協会)、石原莞爾(陸軍、東亜連盟)がいる。さらに菅野正が言うように、「地域の歴史的特殊性と結びついた農本主義(39)」が重視されるべきである。本論文では、山形県荘内地方を舞台に、加藤完治の影響を受けた山木武夫(産業組合青年連盟)、安岡正篤や菅原兵治の影響を受けた長南七右衛門(荘内松柏会)、石原莞爾の影響を受けた平田安治(東亜連盟荘内支部)などを取り上げる。

こうした農本主義者たちが、系統化されることになる。桜井は、①官僚農本主義(祖来、老農、大久保、井上、松方、品川、後藤、安岡)、②地主的農本主義(横井、河上、山崎、岡田、加藤)、③小ブルジョア農本主義(横田、権藤、橋)、④軍部農本主義(谷、清水)の四系統を主張したが、小ブルジョア農本主義以外は官僚農本主義の流れにあるものと捉えていた。これに対して、網澤は、①荻生祖来系統(祖来、品川、横井、岡田、安岡)、②安藤昌益系統、③二宮尊徳系統(老農、二宮、山崎、横田)、という三系統を主張した。網澤の言う荻生祖来系統は、官僚農本主義をさし、その非常時の形態が、権藤、橋、加藤の農本主義であった。そして、安達は、①荻生祖来系統(祖来、品川、前田、横井、山崎、岡田、権藤、橋)と安藤昌益系統の二系統を主張していた。荻生祖来系統を官僚農本主義の展開とみる見方は、桜井、網澤、安達に共通していると言えよう。しかし、老農思想の位置づけが異なっている。すなわち、桜井は官僚農本主義に含め、網澤は二宮系統(土着思想)に含めている。安達は明記しないが、老農思想は耕作農民の伝統的発想を体現するものであろう。だから、安達は老農を安藤系統に含めるものと考えられる。この老農思想の位置づけが、農本主義研究における一つの課題となる。さらに、桜井や安達のように、山崎を地主的農本主義や荻生祖来系統と見るべきか、それとも網澤のように、二宮尊徳系統の土着思想と見るべきかも、検討の余地がある。また、農本主義の主張の変化を、〈農一切主義〉から〈工商との共存共栄主義〉へ、さらに〈非農業への奉仕主義〉へと見る点で、桜井、網澤、安達は共通している。これは、農本主義が、現実の耕作農民の経営から遊離していく傾向をさすものであろう。そのように考えるなら、農本主義は精神主義化していくものであり、現実的根拠を有しないものとなる。しかし、現実的根拠を有しないものが、どうして耕作農民に浸透するのか、説明が難しくなるのである。その点で、加藤、橋、安岡などが、農事改良に取り組んでいたことを重視すべきであろう。農事改良は、農本主義の歴史的展開の論理の中に位置づける必要があると考えられる。

註

- (1) 桜井武雄『日本農本主義』、白楊社、一九三〇年、七二頁
- (2) 桜井武雄『日本農本主義』、一九頁
- (3) 辻達也校注『政談』(岩波文庫、一九八七年)では、「祖来の号は一般には『祖徠』が通用している。しかし彼の自著は、管見の限り、元禄期の一例を除き、他はことごとく『祖来』と記してある」(三七一頁)との指摘がある。本論文は、それにしたがっている。
- (4) 桜井武雄『日本農本主義』、七五頁
- (5)～(6) 桜井武雄『日本農本主義』、七九頁
- (7)～(9) 桜井武雄『日本農本主義』、八一頁
- (10) 桜井武雄『日本農本主義』、七頁
- (11) 桜井武雄『日本農本主義』、一四八頁
- (12) 桜井武雄『日本農本主義』、八五頁
- (13) 河上肇『日本尊農論』の序(横井時敬著)、明治大正農政経済名著集6、農山漁村文化協会、三九頁
- (14) 桜井武雄『日本農本主義』、八七頁
- (15)～(16) 河上肇『日本尊農論』、明治大正農政経済名著集6、四一頁
- (17) 桜井武雄『日本農本主義』、九〇頁。酒匂常明は、農商務省技師で農学博士であったが、後に大日本製糖会社社長となった。
- (18) 桜井武雄『日本農本主義』、九四頁
- (19) 網澤満昭『近代日本の土着思想 — 農本主義研究 — 』、風媒社、一九六九年、七八頁
- (20) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、七八頁
- (21) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、七九頁
- (22) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、四九頁
- (23) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、五二～五三頁
- (24) 網澤満昭『近代日本の土着思想』、一八三頁
- (25)～(26) 網澤満昭『日本の農本主義』、紀伊國屋書店、一九八〇年、一三頁
- (27) 網澤満昭『日本の農本主義』、一四頁
- (28) 安達生恒「農本主義論の再検討」、『思想』四二三号、岩波書店、一九五九年、六一頁
- (29)～(30) 安達生恒「農本主義論の再検討」、六二頁
- (31) 安達生恒「農本主義論の再検討」、六二～六三頁
- (32)～(35) 安達生恒「農本主義論の再検討」、六三頁